世界樹の申し子

藤咲　琳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界樹の申し子

【Ｎコード】
Ｎ６００５Ｙ

【作者名】
藤咲　琳

【あらすじ】
今までの、わたし′はわたしじゃなかった。
あれはわたしの身体を借りていた世界樹の精霊。わたしはそれを世界樹の中から見ていた。
そして精霊は自分の正体を知り勝手に世界樹へと帰ってきた。
そのせいでわたしは世界樹から追い出され自分の身体へと戻される。
彼らが求めるのはわたしじゃなかった、わたし′。
同じを求められるのは不愉快。そんなに、わたし′がいいなら返し

てあげる。
だから世界樹（マザー）、わたしを貴女の傍に返して。

（前書き）

短編ってどこで終わっていいかわからなくなるんですけど、なんとか書き上げたら７０００文字超えてた（ｒｙ

この世界は世界樹の加護を受けて成り立っている。その世界樹の意思を人々に伝えるのは世界樹に宿る精霊。
その精霊がある日こつぜんと姿を消した。人間の青年と恋に落ち、別の世界に駆け落ちしたという。
時代を担う精霊は生まれていたものの、まだ幼くその役目を勤めることができない。
その上、世界樹の精霊は他の精霊と違い成長が遅い。世代交代はまだまだ出来ない。それを悲観しての駆け落ちだったと言われている。
神官長は精霊の成長を早めるために人の世で育てることを決めた。しかし精霊は実体を持たない。彼は生まれたばかりの自分の娘を器として差し出すことを決めたのだった。

それがわたし。
ミーミルと名付けられたものの、それは世界樹の精霊の名となった。

気がつけば真っ白な空間にいた。周りはなにもなくひとりきり。世界樹の中だと知ったのはいつのことだったやら。
けど、世界樹の中は外からのいろんな情報が流れてくる。だからいろんなことを知ることができた。
身体から追い出されたわたしは魂の状態。

わたしが消えないようにと世界樹は守ってくれているみたい。わたしは世界樹をマザーと呼ぶようになっていた。
外の、わたし′の様子も見ることが出来る。たくさんの人に囲まれ、笑っている。
わたしの中には感情というものがほとんどないように思う。
外の、わたし′を見ていてもなにも感じない。誰に対してもなにも感じないのだ。

「だれ？」

なんだか気づけばわたし以外のだれかがいた。
わたしとは違う、たぶん外でいう男の人？
マザーはわたしがひとりで寂しがっていると思ったのかな。
別にそんなこと思いもしないのに。だってマザーがいてくれる。

「僕のことはユーグって呼んで。君は？」
「たぶん、ミーミル」
「たぶんって？」

聞かれて外の方向を指差す。

「あれの名前」

指差す方向にはわたしと同じ外見をした世界樹の精霊がいる。
今日も人々に囲まれて華やかな笑顔を浮かべる精霊は人間の世界でいうともう十二歳ぐらい？
ここでは時間の流れなんて気にしなくてもいいけどたぶんそのくらい経ってると思う。
まぁつまりわたしが生まれてから今までここで過ごした時間もそのくらい。

「ここにいれば外の世界のこと、なんでも見えるし知ることが出来る。どこの国でなにが起きてるとかも全部。それに……独りが寂しいなんて思ったことない。マザーがいてくれる」
「本当に？」

聞き返されてこくりと頷く。
嬉しいとか楽しいとか悲しいとか苦しいとか表情に直結する感情。
感情がないから表情を動かす必要もない。
ユーグがすぐ傍まで来るとまるでマザーに包まれているかのようにふわりと温かなものを感じた。

「僕は君のためにここに来たのかもしれない」
「わたしの、ため？」
「そう。世界樹は君がひとりじゃないということを教えたかったのかもしれない」

わたしの、ためにここに来た。
誰もわたしの存在を知らないこの世界でマザーがわたしのためにユーグを呼んだ？
なんでだろう。マザーのその心遣いとひとりだった世界にユーグが増えて、心がほわりと温かくなった気がする。

「それが嬉しいっていうことだよ、ミーミル」
「嬉しい……？」
「そう。大丈夫、僕が傍にいるから。君はもうひとりじゃない」

そうしてひとりだったこの世界にユーグが増えた。
ユーグはあまり自分のことを話したがらないけどそれでいい。外に出たいなんて思わないから。
世界樹に流れ込む外の情報をユーグは読み取れないみたい。わたしは生まれたときからここにいたからじゃないかって言われた。

「ミーミルはきっと世界樹の申し子なんだね」
「やっぱり世界樹がわたしのマザーなんだ」

嬉しい、という感情を知ってからなんだかむずがゆい。
そういえば外ではユーグのような人を爽やか系好青年？と例えるらしい。
わたしにはよく分からない。

外の世界で三年ほどが流れたときのこと。突然ユーグの姿が揺らぎ始めた。

「ユーグ……？」
「もう、時間が来たんだ」
「時間？　時間って？」
「……ミーミル、ごめん。ここでお別れだ」

ユーグの言葉がぐさりと心に突き刺さる。
お別れ、って。今お別れって言った。傍にいるって言ったのに消えちゃうんだ。

「そう。バイバイ、ユーグ」

ユーグは元々外の人だから。いつかは帰らなきゃいけない。
ここは只人の来れる場所じゃないけどマザーがユーグを呼んだからここで存在することができた。
ふわりと抱き締められるような温かな感覚。

「ミーミル、絶対に迎えに行くから待っていて」

これから先どうなるかなんて分からない。
いつまでマザーの元にいられるのか、あの精霊はいつこちらへくるのか。
それでもたぶんまだまだ時間がかかるのだろう。
世界樹の精霊が他の精霊たちよりも成長が遅いというのなら人での十五歳は精霊にしたらまだまだ子供だと思う。

「ありがとう。傍にいてくれて」

来たときと同じように突然ユーグがその姿を消した。
またひとりに戻ったわたし。けど淋しいなんて思いたくない。大丈夫、わたしにはマザーがいる。
それから少ししてマザーにもたらされた情報のひとつに意識不明だったどこかの国の王子が目を覚ましたというのが紛れていた。

＊

それなのにそれはあまりにも突然訪れた。
外の、わたし′が自分が世界樹の精霊だということを知ってしまった。
そして勝手に世界樹へと帰ってきてしまった。そのせいでわたしはマザーの元を追い出された。

「っ……！」

ばっと起き上がると見知らぬ部屋。いや、ここはわたしの部屋か。
何度か手を握り締めるようにすれば実体がある。わたしはマザーの傍から追い出された。あの精霊のせいで！

「ミーミル！」

部屋の扉が開いて誰かが駆け込んできた。
はじめてみるわたしを生んだ人の顔。なにも思わない、感じない。
触れようとした手を振り払った。

「触らないで」

無表情でそう告げると驚いた表情で見てくる。

「貴方はわたしの母親じゃない。わたしの家族は世界樹（マザー）だけ。貴方たちなんて親でもなんでもない」

扉の向こう側にいる神官長にもその言葉はしっかりと届いているだろう。

世界樹のために自分の娘を捧げた人。十六年間育ててきたのは世界樹の精霊。

わたしを育ててくれたのは世界樹（マザー）。例え血の繋がりはあっても親とは思えない。

「ミーミル……」

「貴方たちの娘が世界樹に帰ったからと言ってわたしを代わりにしないで」

わたしの中にいたのが世界樹の精霊だったことを知っている人は少ない。

だからわたしの豹変に誰もが驚き、腫れ物を触るように扱う。

表情豊かで誰からも好かれていた前までの、わたし、と無表情で感情を表すことのないわたし。

「どうしてそんなにかわっちゃったの？」

「なんだか別人みたいだわ」

そんなの当然だ。別人だったのだから。

鏡に映るのは艶やかなライトグリーン色の髪に翡翠色の瞳を持つ少女。ずっと見てきた自分の姿。

世界樹の精霊がいたことを知っている人たちはわたしに彼女を探そうとする。

覚えたくもなかった感情を覚え始める。

家を出て常にマザーの傍、世界樹の根元で暮らしている。

世界樹の意思を精霊を介さずとも読み取ることが出来るわたしの存在は神殿側としては重宝するらしい。追い出されることはない。

「マザー、今日も紛争が続いている」

幹に触れ、流れ込んでくるほかの国の情報。

ああ、でもわたしが語ることなどほとんどないから。帰った精霊が奮闘しているし。

どこにいてもわたしはひとりだ。本当にひとりきりになった。

「ユーグの嘘つき」

迎えに来ると言ったくせに。ああ、違う。彼はわたしが追い出されこの世界に落とされたことを知らないのかもしれない。

ユーグのその言葉を信じているせいでまた別の感情を覚えた。（淋しい……。

＊

二年が経っても現状は変わらない。常にマザーの傍を離れることなく、わたしは十八歳になっていた。

なんとか様になってきたらしい精霊がこちらへと現れるようにな

った。
実体のない精霊には触れることはできない。今まで傍にあった温かさがない。
なぜそのままわたしと同じ姿で現れるのか。それが一番早いからか。

「ミーミル！」

最悪な場面に出くわしてしまったようだ。
駆け寄ってこようとする生みの親を無表情で見る。

「なにかよう」
「たまには家に帰ってきて。あの家は貴方の家なのよ」
「違う。わたしには家なんてない」

どうせ世間体を気にしているだけだ。
まるで別人のようになった娘が世界樹の傍を離れず帰ってこないなんて。

「世界樹の精霊が自分たちの本当の娘だったらいいのにって思ってるんじゃないの。実の娘を捧げるぐらい世界樹が大切なんだから。変わり果てたことに一番落胆してるのは貴方たちでしょ」

自分たちが手塩にかけて育てた娘は世界樹の精霊。誰からも好かれて自慢の娘だったことだろう。
間逆になって戻ってきた実の娘（わたし）に彼女らしくしろと？

「生まれたくて貴方たちの子供に生まれてきたわけじゃない」

ぱしんっという乾いた音が響いて、頬に痛みを感じる。

「言い過ぎだ」

貴方たちに何が分かるっていうの。

世界樹が世界を支えていることは身を持って知っている。知っているけど、事実はなにも変わらない。

「ミーミル、ちゃんと私たちの話を聞いてちょうだい」

「今更聞いたところで貴方たちがわたしを器として捧げた事実はなにも変わらない。そんなにあの子がいいなら返してあげる。世界樹の精霊としての役割はわたしの方が務められる」

踵を返すとマザーのもとへと走る。

もうこの世界はイヤ。貴方の元に帰りたい。

マザーがいてくれたらそれでいい。だから、だから！

「マザー！　マザー、お願い。わたしを貴方の元に帰して。世界樹（マザー）の声を、意思を完全に聞き取れるのはわたしだけ。この世界に必要なのはわたしじゃない。今までの、わたし、だ。精霊の役割はしっかり果たすから、わたしを貴方の元に帰して……」

世界樹に向けて精一杯手を伸ばす。

わたしの声に呼応するように世界樹が淡い光を発しはじめた。

「もう、この世界にはいたくない。みんな……嘘つきだ……」

傷付くだけの約束ならいらない。護れない約束ならしないで欲しかった。

光の粒子が降り注いできて世界樹（マザー）の意思を感じる。

「マザーがいてくれたらわたしはひとりじゃない。精霊になればずっと貴方の傍にいられる」

この世界にはなんの未練もない。必要とされている人がこの世界にいるべきだ。

精霊として頑張っているあの子には悪いけど、今度はわたしが返してもらう番。

「うん。帰る、帰って世界樹の「そんなの許さないよ」

最後の言葉を告げるはずだったのに誰かによって遮られる。

やんわりと誰かの手が言葉を遮るようにわたしの口を手で覆ったのだ。

「そんなこと、絶対に許さない」

耳元で聞こえる低い声。どこかで聞いたことのあるような気がしたけどその手を振り払う。

「邪魔しないで！」

マザーがわたしのお願いを聞いてくれそうなのに。やっと帰れるのに。

世界樹に向けて伸ばそうとした両手首を掴まれてぎゅうっと後ろから強く抱き締められる。

「やっぱり君は世界樹の申し子なんだね、ミーミル」

「え……？」

なんとか逃げ出そうとするわたしの耳に届いた言葉に動きを止め

る。
この人は今なんて言った？
「ようやくここまで来られたのに世界樹に帰るなんて言わないでほしい」
こ、の、声は…まさか？
「ユーグ？」
あれからもうこっちでは三年経ってるし、いなかったことにして思いださないようにしてきたのに。
腕の拘束が緩んでその腕の中から逃げ出すと恐る恐る後ろを振り返る。
「ミーミル」
共にいた頃の面影がある。青年は間違いなくユーグだ。
きらきらとしたブロンドに薄紫の瞳を持つ本物のユーグ。
「迎えに来たよ」
変わらない笑顔を向けられて正直焦る。
服装とか物凄くどこかの王子様って感じだし雰囲気もなんだか高貴というか。
「目が覚めてから自由に動けるようになるまで三年、かかった。迎えに来るのが遅くなってごめん。けど、これからはずっと傍にいてあげられる。だから世界樹に帰るなんて言わないでほしい」

マザーがわたしにもたらした情報に意識不明だった王子が云々っていうのがあった。
まさかそれはユーグのことだったなんて。だからマザーはわたしにその情報を与えたの？

「そんなの無理だ。貴方は王子でしょ。わたしの傍にずっとなんていられるはずがない」

少しずつ離れるように後ずさっていく。
さすがにわたしだって身分差ぐらいは分かっている。王子であるユーグにそんなことが出来るはずがない。

「この三年間なにもしてこなかったわけじゃない。ミーミルを迎えに来れるようにいろいろと準備してきた。それに僕はもう元王子だからその点は安心してほしい。君と生きていくための障害になるものなら全部必要ないから」

離れるほどに近付いてこられてとうとう世界樹の幹に背が触れた。
爽やかな笑顔を浮かべているが言っていることは国を揺るがすほどのことだと思う。

「よ、よく意味が分からない」
「うん、だからね。ミーミルの傍にいられるように王位継承権放棄してきた。王位争いにも疲れてきたしこれがいい機会だと思って」
「はっ！！？」
「僕は最初から本気だよ。世界樹でひとりでいる君の姿を見つけたときからずっと」

掬い上げるかのように軽々とわたしを抱き上げるとさっさと歩き出す。

「ユ、ユーグ！」
「世界樹の傍を離れなくてもいいように、世界樹の傍にある王家の領地を分捕ったからそこでふたりで暮らそう」

自分が物凄く焦っているのが分かる。
この世界に来てから感情と言うものを嫌というほど理解したけどまだ表情は追いつかない。

「調べさせてもらったけど、精霊が帰ったあとの対処を間違えたね。それじゃあ実の娘よりも精霊を愛しているというようなものだ。だからミーミルは貰っていくよ」

事態を見ているしかなかった両親にユーグが告げる。
ユーグに抱きかかえられているわたしに神殿ですれ違う人たちはみな驚いた表情を見せた。
神殿の正門には一台の馬車が止められていて、ユーグはわたしを抱えたまま馬車に乗り込む。

「出発してくれ」

その言葉に馬車はゆっくりと動き出す。
世界樹から追い出されて二年、過ごしてきた街を離れていく。やっぱりなにも感じない。

「あの、ユーグ」
「なに？」

それはそれは嬉しそうな表情を向けられる。一瞬、言葉に詰まった。

「……重くないの」

現在、お姫様抱っこの延長のように膝の上に座らされている。

自由に動けるまで三年かかったという割りにわたしを抱きかかえるなんてけっこう無茶だと思う。

「全然重くなんてないよ。思っていたよりも軽くて本当にちゃんと食べてるのか心配になるぐらい」

ぺたぺたと身体に軽く触れてくる。

「僕としてはもう少しぐらい……こんなに細いと心配だな」

わき腹をそろりと撫でられてぞわっときて思わず声を上げる。

「ひゃうっ」

「ずっとこんな風に触れたかった。ああ、ミーミル。やっと本物の君に会えた」

そういえばさっきもようやくって言ってたけどもしかしてユーグはわたしが戻されたことを知っていたのだろうか？

「ユーグは知ってたの。わたしがこっちに戻されたこと」

「僕が動けなくても情報を集めてきてくれる人間はいるから。世界樹に精霊が帰ったことも、世界樹を祀る神殿の神官長の娘がまるで別人のように変わったこともちゃんと聞こえてきていた。世界樹のことをマザーと呼んで片時も離れようとしないともね。それを聞いてすぐにミーミルが戻ってきたんだって分かった」

ユーグはどこか自嘲気味に笑った。

「それなのに僕はまだまだ動ける状態じゃなくて君を迎えに行くことさえできなかった。意識不明な状態が三年も続いて目を覚ましたら、指一本動かすのにも大変でだいぶ苦労したよ。それでも君が戻ってきていると分かったから頑張れたんだ」

「ユーグ……」

「王位継承権の放棄に関しても簡単じゃないしこれでも急いできたんだよ？　ミーミルは世界樹に帰ろうとしているし……」

「だって周りが求めるのはわたしじゃない今までの、わたし′だ。ユーグだっていないし、マザーまで盗られたらわたしは本当にひとりになる。それぐらいなら求められている人が戻ってくるべきだと思った。だからマザーの元に帰ろうとしたのに」

「そうか。だから世界樹は僕のことを急したのか」

その言葉にこてりと首を傾げる。

マザーがユーグのことを急かしたって……やっぱりマザーには何もかもお見通しなんだ。

「この世界に戻されてからいろんな感情を知った。あまり知りたくなかった感情の方が多い」

ユーグの服をきゅっと掴んで見上げる。

「こっちに戻ってきて今、はじめて嬉しいと思える。ユーグに会いたかった。もしかしたらユーグはわたしがこっちに戻されたこと知らないんじゃないかって、世界樹に戻ればまた会えるんじゃないかって思ってた。だから、迎えに来てくれて嬉しい。ずっと……淋しかった」

わたしの首筋に額を押し当てながら腰に回された腕に力が込められて更に密着度が増した。
はぁっと吐いた息が首に当たって僅かに身動きする。
「あんまり僕のこと煽らないで。今だってけっこうギリギリなんだ」
「あお……？」
更に首を傾げるとユーグは苦笑していた。
ふいに顔が近付いてきてちゅっと唇に柔らかなものが触れた。
「こういうこと」
「！！？」
それがユーグの唇だと気付いて思いっきりうろたえてしまった。
「愛してるよ、ミーミル。これから先ずーっとふたりで生きていこう」
「ふ、ふつつかものではございますが、よろしくお願いします」
マザー、どうやらわたしは元王子という生涯の伴侶を得たようです。
これから暮らしていく場所はすぐ傍というわけには行かないけど、いつでも会いにいける距離にあるんだって。
とりあえず生活が落ち着いたらユーグと一緒にマザーに会いに行こうと思います。
我侭言って困らせてごめんね。わたし、幸せになります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6005y/

世界樹の申し子

2011年11月18日01時39分発行